

キーワードは“のどに刺さった小骨”

「現代社会における教育の課題」を聴く

—さまざまな教育課題に立ち向かうには—

いじめや学級崩壊など、学校現場はさまざまな教育課題を抱えている。これらの解決法はあるのだろうか。仮に解決法がないとすれば、実践力を身に付ける教職大学院では何を教えているのか？ 福岡教育大学教職大学院の実際の授業を覗いてみて分かったこととは——。

取材・構成／協同出版



「現代社会における教育の課題」とは

福岡教育大学教職大学院には、今年度よりスタートした「現代社会における教育の課題」という必修授業がある。6人の教員が教壇に立ち、4つのユニットでオムニバス形式で行われる。この授業の内容はというと、いま学校現場で起きているさまざまな課題を取り上げて、院生に考えさせるもの。指導教員たちは、それらの課題を“のどに刺さった小骨”にたとえる。なるほど、うまい表現だ。小骨を抜く即効性の高い手段はない。そしていつまでもややもや感が残る——。

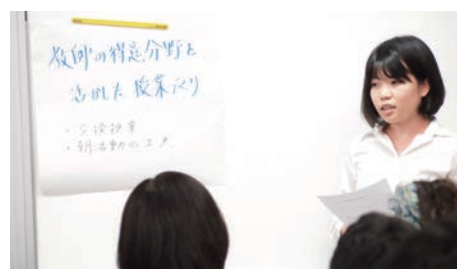
その最終授業日を見学できた。14回の授業を経て“のどに小骨がたくさん刺さった”状態で、ストレートマスター・現職教員混合のグループは、「学校経営構想」についてプレゼンテーションをする。「2つの統合したこの〇〇小学校は、いじめもあって……」など、かなり具体的な設定を設けているグループもあった。「学力向上のために何をするか、地域との連携は」などの発表後に、

指導教員や他の院生からは鋭い質問が飛ぶ。想定していなかった角度からの質問には、表情に戸惑いの色が浮かぶこともある。それでも、活発な議論と、わきあいあいとした雰囲気、とても印象的だった。

“小骨”はいかに刺さったのか？

講義後、話を聞いた。ストレートマスターの井上さんは「話し合いの中で、現職の先生方から得るものがたくさんありました」と語り、島津さんも「他の院生からの質問で、とても細かな点を問われて、自分では考えていなかった新しい視点に気付きました」と話す。「児童・生徒等の実態に関する教育課題」について全4回の授業を受け持った村田教授は、「院生が“小骨”に気が付くのを第一に考えています」と言う。「現職教員の院生も、同じようにもやっとした気持ち悪さを感じてくれていたので、うまくいきましたね」。

それに対して「小骨どころではなく“大骨”でしたよ！とにかくもやもやして……」とストレートマスター2人は声を揃える。「答えを出してスッキリしたくても、それができない。自分の意見も、みんなが言うことも正解だと思う。でも、それらが合っているかどうか分からなかった……」（島津さん）。



現状でできることは何かを考える

そんな悩める2人に村田教授は優しく答えた。「すぐに解消されるのであれば、いま教育課題として存在しません。“小骨”が存在する背景を理解し、それを解決するのに、どういうことが考えられるか。これは後期授業『未来をつくる教師の力量』にもつながっていきます」。

おそらく、いまの教員には“小骨がない状態”などないのだろう。小骨は大骨になったり、あるいは小骨がどんどん増えていくのかもしれない。そんな状況を踏まえて、この授業の目的は“教育課題に真摯に向き合う姿勢”をつくることなのだろうか。

「そう。それを狙っています」と村田教授はキラリと眼を光らせた。「刺さってる小骨は取れなくても、人は食事をしなくてはいけない。教育課題を解決できずとも、教師はよりよい教育を実践していかなければいけないんです。現状で可能な手立てを考えて、少しでもよりよい形で、目の前の子どもたちと接する。その中で、自分が進むべきベクトルを持つことが大切なんです」。

青木教授が口を開いた。「ストレートマスターは、“不登校”や“いじめ”など名詞としては知っているんですね。その背景を考えさせれば、『もしかすると共通点があり、Aを解決すれば、Bについても少し負担が軽くなるんじゃないか？』と気付いたりするのです」。

課題に立ち向かう姿勢を学ぶ授業

そう、繰り返すが、教育課題に明解な解答はない。井上さんは言う。「学部生の頃は、『この課題には、この対処法』という方程式があると思っていた」。しかし教員採用試験の面接試験で、理屈として正しくても「1 + 1

は2だ」と言い切ってしまうのはどうか。村田教授はあえて問う。「面接官からすれば『現実を分かっていないのでは』となるのでは。むしろ、なぜ解決困難なのかをよく認識し、逡巡しつつも、それに立ち向かう人の方がいいと思います」。青木教授も「困難の多い学校では、課題に立ち向かってくれる強くて若い人を求めているんじゃないかと思います。私たちは、そういう教師を育てたい」、かつて中学校で教鞭を執っていたという若木教授も「現場では小骨をスルーしてしまいがち。一度立ち止まって考える、さらに言えば、いまの教育が本当に正しいかさえも考える。答えられないけど、避けて通れない問いを、考え続ける。“問い直し”の姿勢を常に持つ教師になってほしい」と熱弁する。

教育課題の解決策がなくても日々よりよい教育を実践するために

熱い教授陣の言葉を受けて、井上さんは「いまの自分はどうしても理想を語ってしまうけれど、教育課題に自分が向き合う姿勢は定まったと思います」、島津さんも「今回の発表で、自分の強みを生かした学級経営案をつくれて、少し成長できたかなと感じました」と振り返る。この日の担当だった青山准教授は、「実際に問題に直面した経験がないにも関わらず、ストレートマスターは熟考して発表に臨んだと感じました」と嬉しそうに語った。

ふたりの院生（と指導教員）に共通するのは、教育課題に真摯に向き合い、いまの自分にできることを探そうとする前向きな姿勢。これこそが、いま文部科学省や教育委員会が求める“学び続ける教員”なのだろう。

福岡教育大学教職大学院の「現代社会における教育の課題」は、問題解決能力を身に付けるにふさわしい、充実の授業であった。